

「神の国と十字架」（ルカ四章二八〜四四節）

1 イエスの宣教

パレスチナの一隅ガリラヤ、異邦人のガリラヤ（イザヤ八・二三）と呼ばれ、イスラエルの中でも昔から蔑まれてきた地方（ヨハネ一・四五）、しかしこのガリラヤこそ、そこでイエスが育ち、やがて福音が始まった、キリスト教の原点の地です。

その地でどのようにして福音が始まったのか、そもそも福音とは何か、興味の尽きない聖書箇所をここ何回かにわたり私どもは学んできています。キリスト教というのはこういうもの、それぞれ考えていることがあると思いますが、それはそれとして大切にしながら、聖書が示す福音、その始まりに、いつもこころ新しく耳を傾けるものでありたいと思います。

ガリラヤにおけるイエスの福音の宣教は会堂（シナゴグ）における礼拝から始まった、さらにいえばイエスによる聖書の説き明かしから始まったといって間違いないと思います。

この会堂におけるイエス、私どもはこれを郷里ナザレから、ガリラヤ湖畔のカファルナウムの町へと辿ってきました。今日の箇所はカファルナウムの会堂を立ち去ったところから始まっています。その日は安息日でした。今日の箇所、途中、四〇節に、「日が暮れると」とあります。安息日はその日の日没までですので、夕方に安息日は明けたこととなります。

さらにその少し先、四二節です、そこに「朝になると」とあります。そうすると今日の箇所には、安息日の礼拝が終わって、次の日までのことが書かれていることになります。

これによってイエスがガリラヤでどのように過ごしていたか、手に取るように分かります。ルカは、ここで、これから始まるガリラヤ伝道全体の前置きのような形でイエスのふだんの生活の様子を伝えているのです。

こうした生活を、イエスは、自分で好きで、無自覚に送っていたわけではありません。もちろん、そうではなくて、イエスはメシア（キリスト）であるとのはっきりした自覚のもとに生活していたのです。そのはっきりした思いが、今日の箇所の終わりにある言葉に示されています。

イエスは言われた。「ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならぬ。わたしはそのために遣わされたのだ」。そして、ユダヤの諸会堂に行つて宣教された（四三〜四四節）。

「わたしはそのために遣わされたのだ」、ここにイエスの思い、使命意識がはっきり出ています。

「そのために」というのは、「神の国の福音を告げ知らせ」るためです。それもすべての町のすべての人に告げ知らせることであつて、そうしなくていい人など一人もいません。

福音を告げ知らせること、別の言葉でいえば、いまお読みした箇所の最後のところ

に出てくる言葉を使えば、宣教、です。神の国の福音を宣べ伝えることです。これがイエスがここで自らの使命として自覚し、じっさい遂行していたことです。イエスの働きを引き継ぐ私ども教会も、それゆえ宣教を何よりも使命とし、変わらずに課題とされているのです。

さてこの神の国の福音を告げ知らせること、宣べ伝えること、宣教、この中に癒やしが含まれていることは、言うまでもありません。私どもはすでに先週、カファルナウムの会堂での一人の男の癒やしのことを聞いています。彼には汚れた霊、悪霊がついていました。イエスによって、イエスの言葉によって悪霊は追い出されます。男は解放されます。救われます。それこそ神の国の福音の宣教であったのです。神の国の到来の、神のご支配の力強い証し、それが癒やしにほかなりません。癒やしが神の国の福音の宣教であることはいうまでもありませんが、癒やしだけが、神の国の宣教ではありません。もしそのように考えるなら、イエスによる神の国の宣教を間違っ理解することになります。

このことと関連してちゃんと考えなければならぬ問題が、今日の箇所の後の方に出てきます。後で取り上げることにして、まずはシモン・ペトロのしゅうとめの癒やしを見ることにします。

2 一同に奉仕

場所は同じくカファルナウムです。そこにペトロの家もあったようです。会堂の礼拝が終わり、イエスは会堂を後にします。安息日はまだ続いています。

イエスは会堂を立ち去り、シモンの家にお入りになった。シモンのしゅうとめが高い熱に苦しんでいたので、人々は彼女のことをイエスに頼んだ。イエスが枕もとに立って熱を叱りつけられると、熱は去り、彼女はすぐに起き上がって一同をもてなした(三八〜三九節)。

シモンは、ペトロの本名です(五・八)。じつはまだ正式には、ペトロがイエスの弟子であるということは出てきていません。それは次の五章で語られます。ですからイエスはしゅうとめが熱を出していることを、ペトロから聞いたのではないかも知れません。ここには「人々」が彼女のことをイエスに頼んだとあります。ペトロも会堂の礼拝にはいたと思われず。

シモンのしゅうとめは高熱で苦しんでいたのですが、イエスによるいやしの行為はついさつき会堂で悪霊を追い出したときのように、まるで悪霊と対決しているかのようになされています。

イエスは「枕もとに立って熱を叱りつけられ」ます。すると熱は「去って」いったのです。枕もとに立って、というところは、彼女の上に身を屈めてと訳している聖書がいくつもあります。

ですからここでも、カファルナウムの悪霊つき男の癒やしのときのように、いわゆる悪魔払い(エクソシズム)の行為と、表面上似たところがあります。しかしここでも力をもっていたのはイエスの言葉でした。叱りつけたイエスの言葉、その言葉に権

威と力があつたのです。

このシモンのしゅうとめの癒やしで目立つことは、彼女が、熱が下がって、すぐに起き上がり、一同をもてなした、というくだりです。熱がすぐ引いたことも刮目（かつもく）に価しますが、それ以上に私どもにとって印象深いのは、癒やされた後のしゅうとめの姿です。

なぜ印象深いかといえば、カファルナウムの会堂で癒やされた男の場合、そうした応答は書いてなかったからです。もちろん書いてないから、感謝も何もしなかったとはいえませんが、それをイエスも要求していたわけではありません。自由になり、ふつうの生活に戻るといふことでよかったです。

シモンのしゅうとめは「すぐに起き上がって一同をもてなした」とあります。「もてなす」と訳されている言葉は、仕える、奉仕する、という言葉です。イエスによって直していただいた、イエスによって救われた、それは、そのまま、イエスだけでなく（マタイは「イエスをもてなした」八・一五）、そこにいたすべての人に仕えることと結びついています。それは、救いにあずかった者の特徴をもっともよく表しているように思います。ただ自分のために生きるのではなく、イエスに仕え、世に仕える、人々に仕えることです。彼女は、聖書ではここにしか出て来ませんが、その振る舞いによって見事な証しを残したのです。

「日が暮れると」（四〇節）というのは、先ほど申し上げたように、安息日が終わったという意味です。安息日に動ける範囲、その距離は、一般に律法に定められていました。安息日が終わって人々は動き始めます。

日が暮れると、いろいろな病気で苦しむ者を抱えている人が皆、病人たちをイエスのもとに連れてきた。イエスはその一人一人に手を置いていやされた（四〇節）。

イエスの評判をききつけ人々は「いろいろな病気で苦しむ者を抱えて」駆けつけてきます。ガラヤはもちろんのこと、エルサレムからも、ヨルダン川の向こう側からも、評判は遠くシリア中に広まっていました（マタイ四・二四）。イエスは一人一人を癒やされたのです。

3 神の国と十字架

さて朝になります。

朝になると、イエスは人里離れた所へ出て行かれた。群衆はイエスを捜し回ってそのそばまで来ると、自分たちから離れて行かないようにと、しきりに引き止めた（四二節）。

朝になると、です。朝早く起きて、ではありません。昨晚からの癒やしの業が明け方まで続いたことを意味します。ですからマルコによる福音書などとは違っています。マルコでは「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた」（一・三五）とあります。この最後の「祈っておられた」とい

うのも、ルカにはありません。ここでは祈るためというより、休息を取るため離れたのだと思います。

いやもしかしたら、別の意味がそこにあっただかも知れません。それは聖書のその続きと関係があります。

群衆はイエスを捜し回ってそのそばまで来ると、自分たちから離れて行かないようにと、しきりに引き止めた(四二節)。

この群衆、カファルナウムの住人だけでなく、また夜通しイエスによって癒やされた人だけでなく、イエスの奇跡を求めて集まってきた人々すべてを指していると思われま。

その彼らは、イエスの神の国の宣教を、病人の癒しや悪霊の追放というその奇跡的な業においてしか受けとっていない、受けとろうとしないのではないだろうか、しかもそれを自分のために要求するとすれば、そこには、ひそかなエゴイズムが、罪が入り込んでいるのではなからうか、そうだとすれば、イエスが彼らを離れたのは彼らの思いに対するはつきりした拒絶、この言葉が強すぎるなら、それははつきりした問いかけなのです。

ここに一つの大きな問題があります。私をはじめに、ちゃんと考えなければならぬ問題といった問題です。それは、人々は癒やしを求めても神の国は求めないという現実です。幸福は求めても、神の国は求めないという人間の現実のことです。

ここには、これまで、たとえばナザレにおいて(一六〇三〇節)、イエスを町の外にまで連れ出し崖から突き落とそうとした人々とは、まったく別の問題が現れているように見えます。

むしろ私も人間に共通した、もっと根本的な問題です。病気の癒やしをイエスに求める、神に求める、それは信仰深い行為です。しかしその敬虔さに紛れ込んで、神の奇跡を自分の意のままにしようとするひそかな自己愛です。宗教にも、敬虔さにも潜む人間の根本的罪です。

私どもは神の国を求めます。神のご支配がなることを願います。御国を来たせたまえ、みこころの天になるごとく地にもなさせたまえと祈るのです。これを願う敬虔な思いの中にも顔を出す人間の自己愛、罪の問題、この罪の贖いをともに願うことなしに神の国を待ち望むことはできないのです。

イエスの十字架の死と復活、罪の贖い、これを信じるところに、はじめて神の国は開けてくるのです。またそこに開けてくるものでなければ、真の神の国とはなりえないのです。神の国のもたらし手としてのイエスの言葉も、その振る舞いも、私どもにとって意味をもつものとはならないのです。主の十字架を介して、さらに神の国を目ざしてともに歩んでいきたいと切に願うものです。